

桜船会 だより

第 44 号

発行日 2020.5.17

発行者 桜船会

発行責任者 木村允紀

三菱電機大船地区定年退職者の会

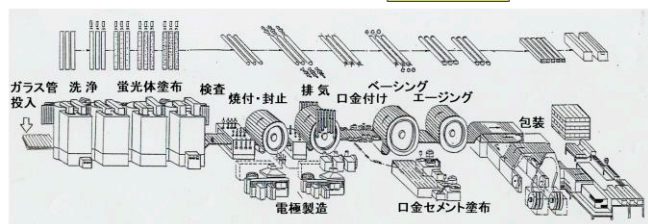
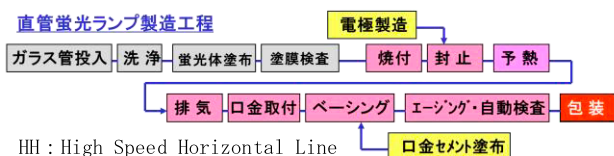


▲ 2019 年度の各種行事、活動の写真

いきいきライフ：蛍光ランプに思うこと	大澤 隆司
いきいきライフ：国際標準化に携わって	柳 正
いきいきライフ：「最近感じたこと二つ。」	今飯田 哲
いきいきライフ：メダカの素人飼育奮戦記	中野 嘉博
いきいきライフ：入社・退職・今	橋本 栄次
いきいきライフ：念願の神奈川県最高峰への登頂	松本 利夫
活動報告：桜船会の活動状況	事務局長 森田 茂
事務局：会員動向・編集後記	事務局・編集班

子供の頃テレビでアメリカの戦争ドラマ「コンバット」を楽しみに観て育った。従ってドイツは私にとって敵であった。事もあろうにその後私がドイツ人と仕事をする羽目になろうとは思ってもみなかった。

蛍光灯の仕事をしているエンジニアをランプ屋と呼ぶ。そのランプ屋の夢は HH ラインであった。4 フィートの直管蛍光灯を水平にして 1 時間に 6,400 本も生産する設備だ。旧船電の蛍光灯は、垂直で作られていたので片方の電極をガラス管に封止し終わると、4 フィートのガラス管をぐるりとひっくり返して反対側を封止していた。このために時間がかかる。HH ラインはガラス管内面に蛍光体塗液を塗布・乾燥した後、ガラス管を水平のまま両端同時に加工を行う高速性が最大のメリットだ。



そもそも蛍光灯なんておかしな家電品である。電子回路もプリント基板もなく、20 億円を超えるとされる設備投資と、電機会社では潰しの効かない蛍光体の化学知識、他に利用価値のない水銀蒸気放電、高速ガラス加工技術を用いて一本数百円の蛍光灯を作る。なんと贅沢な仕事であろう。こんな家電品は他に無い。従って参入障壁は極めて高く、伊達や粋狂では始められない。おそらく蛍光灯をお使いのお客様は、こんな苦労は知らない。

ドイツオスラム社との J/V のオスラム・メルコに出向となり工場が掛川に建ち、地縁の無い掛川に移った。1992 年、念願の HH ライン立上げとなる。蛍光体を混ぜたペンキ状の塗液を立てたガラス管の内面に上から 12 本同時に流し込む。全てがうまく塗れず上部に隙間ができたり、下部に筋状の塗り残しができ、乾燥機から出て来ると、あっという間に不良の山ができる。その後ガラス管は水平にされ、焼付後両側同時に封止が行われる。直径数 m の大きなドラムに

64 本分のヘッドがあり、ドラムが一回転すると封止が終わる。しかし両側で 128 個ものリングバーナーに一つでも目詰りなどがあればすぐにガラスは溶けずに不良となる。同様なドラムの設備で排気工程が続く。中を真空に引きながら電極を活性化し、水銀とアルゴンガスを入れる。クリプ



封止工程

トンを添加したり、圧力を変え特性を決める。その後両側に口金が付けられ、最後は 128 ヘッドの巨大なエージングマシンで点灯され良品が包装工程に回る。不良はここで下の箱に落下する。ラピッドスタートと呼ばれるランプはガラス管内面に電導膜が設けられていて、グローランプ無しで点灯するのだが、厄介なことにうまく始動せず、ここでも不良の山ができる。ガラス管故いろいろな場所で割れ、それが引っかかって設備が止まる。あまたの苦労の末、気難しい HH ラインは生産計画を全うできる様に立ち上がった。ドイツ人とも苦労を共にし、気心が知れるようになり頻りに駅前酒を飲むようになった。

日本の蛍光灯メーカーは大手のみであったが、ランプに印刷されたメーカー名は全社口金ピンにピッタリ平行であった。従って照明器具につけられると正確にメーカー名が真下の見やすい位置に来る。几帳面なものでわざわざマーク位置を揃えていたのだ。これが少しでもずれると不良になった。その後世界中のランプ工場を訪ねたが、マーク位置を揃えているのは日本だけであった。駅の売店で雑誌を買うとき、他人が触っていない 2、3 冊下のものを選ぶような日本人にしか理解できない習慣であることは、ドイツ人との付き合いが長くなっていろいろ知るところとなった。

HH ラインも 2019 年 9 月に 27 年間で延べ 5 億本を超える直管蛍光灯を生産し終え、その任を解かれた。同時に長年築き上げた私の蛍光灯の知識はもはや誰も必要としなくなった。時代はすでに LED へと移っている。



19 年 9 月鎌倉にて

私が本格的に国際標準化に携わるようになったのは、2007年に当時の(社)日本電球工業会、現在の(一社)日本照明工業会(以下は単に「工業会」と称する)のSC34A分科会の主査を仰せつかってからである。

SC34A分科会というのは、電気関係の国際的な標準化団体であるIEC(国際電気標準会議)の照明関係の技術委員会であるTC34に所属する光源関係の分科会であるSC34Aの日本国内でのミラー委員会である。工業会は照明に関わるIEC規格の国内審議団体となっており、TC34にはSC34A(光源)以外に、SC34B(口金)、SC34C(制御装置)、SC34D(器具)の分科会がある。分科会の主査は、提案されている照明関係のIEC規格について、会議で審議・検討したうえで、国内意見を取りまとめる。また、日本で開発した新技術・新製品の規格の中で、IECに提案する要望があれば文書としてまとめなければならない。更に年2回開催される国際会議において、日本代表として参加し、取りまとめた提案・意見を発表するとともにそれ以外の件についても日本が不利にならないように議論に加わる必要がある。国際会議であるので、使用される言語は基本的に英語である。当初は私の英語力で通用するかどうか心配であった。しかしながら、いざ参加してみると事前の準備と会議中の他のメンバーからのサポートがあれば何とかなるものである。特に私は、三菱電機オスラム(株)に所属していたので、親会社であるドイツオスラム社のメンバーが良く面倒を見てくれたので本当に有難かった。

SC34Aの主査は、工業会の中で当時、蛍光灯ランプ大手5社と呼ばれていた三菱、松下、東芝、日立、NECの中から輪番制で選ばれ、任期は6年である。三菱に順番が回ってくる30年に1回のチャンスに私を指名していただいたことに対して感謝している。そのおかげで任期満了までに訪れた国はアメリカ、フランスをはじめ世界10か国におよび、多くの人と懇意になって様々な文化と触れ合うことが出来た。これらは私にとって今でもかけがえのない財産として残っている。

ただ一つ残念なのは、2011年の春の国際会議を東京で開催すべく工業会の事務局と一緒に準備を進めていたが、東日本大震災の為にやむを得ずキャンセルしたことである。この時はスイスメンバーが好意により代替の場所を提供してくれ、事なきを得た。

会社の業務と並行して務めていたSC34A主査の役割にも慣れてきた2011年9月に縁があって、工業会技術部の職員として三菱電機オスラム(株)から出向することになった。工業会での主な仕事はIEC、環境などに関わる国際業務と規格・標準化である。これにより主査の任期満了後も国際標準化に携わり続けることが出来た。

私が主査を務め始めた2007年頃は蛍光灯などの従来光源に関する規格についての議論が主であった。しかしながら、その後LEDが市場を席卷するようになってからは、OLED(有機EL)も含めた個体光源の規格整備が急速に行われた。

2014年から3年間は、日本が主導権を取ってOLEDの国際標準化を進めるための経済産業省委託事業に山形大学とともに参画した。その時の功績が認められて2017年10月に「工業標準化事業表彰経済産業大臣表彰」を受賞した。



【経済産業大臣賞の表彰状と記念トロフィー】

OLEDの国からの委託事業は現在も続いており、私も微力ながら山形大学の先生のお手伝いをさせていただいている。

工業会事務局の仕事で一番印象に残っているのは、2014年に東京国際フォーラムで開催されたIEC全体会議にTC34を招致したことである。東京国際フォーラムのりっぱな会議室は提供してもらえませんが、その他の運営は各TCを招致した日本の各審議団体に任されていた。事前に周到な準備を行うとともに関係者の協力を得て、会議を無事に成し遂げることができ、胸をなでおろしたことを今でも覚えている。

最後に標準化で今、課題となっているのは人材の確保である。ノーベル賞を受賞された吉野彰さんは、企業としては目先のことだけにとらわれることなく、基礎研究を行う必要があると述べておられる。それと同時に世界で活躍する標準化を担う人材を育成することが重要であると考えます。

<年金の手続き>

60代になると、誰もが年金の受給を考えます。60歳から70歳までの間に受け取り、標準の65歳受け取りに比べ、60歳受け取り開始では3割カット、70歳受け取り開始では、42%アップといわれる。ただし、配偶者等がいて、加給年金を受けるには、老齢厚生年金の受給が必要となります。

そこで、小生は、両親の寿命を考慮し、老齢基礎年金を繰り下げ、受給申請をしようと、藤沢年金事務所に連絡すると、待たなくても済むように、「日時を予約してください」と言われ、1か月先を予約しました。予約日の都合が悪くなり、再予約しようとする、さらに1か月先の予約となりました。再予約の日も怪しくなってきたので、これ以上遅らせると70歳の誕生日が過ぎて、受け取り損なうと思ったので、予約なしで、飛込み訪問をすると、街角の年金相談センター藤沢オフィス（藤沢駅近い）を紹介され、スムーズに処理をしていただきました。「1か月先の予約」は年金の支払いを延ばすためではなく、説明のために十分時間とるためだそうです。最後の手段として、飛込訪問も可能です。



<広島・長崎原爆投下の反省>

11月下旬にはローマ教皇が広島・長崎を訪問され核兵器廃絶を訴えるメッセージを発信されました。

毎年8月には、広島・長崎の原爆の被災状況が全国放送され、「核兵器を作らず、使用せず。」が世界中に発信されています。しかし、これに対して若干違和感を持たれている方もおられるのではないのでしょうか。それは、ひとつには、所詮他力本願であり、自力では成しえない虚しさだと思います。確かに、核兵器の被害は、きわめて甚大で人の感情に訴えます。原爆投下が非人道的と非難されることがありますが、日本降伏のための犠牲と天秤にかけたという米国側の話もあります。

ここで、太平洋戦争末期を振り返ると、日独伊三国同盟のイタリアは1943年に降伏し、ドイツは1945年5月に降伏、1945年7月にポツダム会談が開かれ、日本の降伏条件について、ポツダム宣言がまとめ

られました。しかし、7月の時点では、このポツダム宣言を日本は受け入れず、8月6日には広島に原爆が投下され、8月9日には、長崎に原爆が投下され、いずれも10万人規模の人が亡くなりました。

これを後から読むと三国同盟のイタリア、ドイツが降伏しており、もう勝ち目がないのに、なぜ日本だけが頑張っていて、原爆投下という貧乏くじを引いたのかと思われませんか。

8月9日の、日ソ中立条約を破ったソ連の対日参戦により、このときには、ポツダム宣言を全面受託し、無条件降伏しました。

なぜ日本がこのような経緯を辿ったかについて、振り返ることは有意義だと思います。1944年7月にサイパン島が陥落したころから、岸信介が本土爆撃の危機感から講和を進言したが、国内で受け入れられませんでした。

その後の蒋介石との打診交渉も不成立。日ソ中立条約を結んでいたソ連を仲介役として和平交渉を行おうとしたが、ソ連は1945年2月のヤルタ会談で、ヨーロッパ戦線勝利後、日本に戦争することを宣言しており、交渉はまとまりませんでした。さらに、国体護持という問題もあり、難しかったようです。

しかし、こういう事情があつて、自主的な戦争終結に導けなかったことにより、原爆投下が先に来ってしまったことは、非常に残念に思われます。

現在、イージスアショア（大気圏外飛来の弾道ミサイル迎撃）が話題になっています。しかし、その前の政治的役割（防衛条約）が重要なのだらうと思います。

核戦争の危機としては、1962年のキューバ危機が思い出されます。この時には、核シェルターまたは、地下街に入りたいと痛感したものです。

ここ数年、世のなかの動きが変わってきたような気がします。トランプ米国大統領出現以来、従来は遠慮していたことが成されるようになりました。私たちも幅広く考えたほうが良いと思うようになりました。それでも、桜船会の良識のある意見を、そして健康で長生きをして、選挙などにより反映していければよいなあとと思っています。某ノーベル賞受賞者の話によると、ここ10年くらいで、殆どの病気が治るようになるとのことで、人生100年も現実的になりそうです。人生を楽しみましょう。

メダカが絶滅危惧種に指定されたとのニュースを何年か前に聞いたことがある。小さい頃、田舎の小川で沢山泳いでいたあのメダカが？と驚いた。

以前から、横幅 30cm 位の水槽で金魚を飼っていたが、絶滅危惧種になったメダカの保存をやりたいと思った。保存活動がどのように行われているか知らないが、保存飼育をするなら、飼育経験、ノウハウが必要であり、まず観賞魚として出回っているメダカで習得しようと考えた。

意を決して、3年ほど前の正月、鯉の子供位に大きく成った金魚を、鎌倉湖の鯉と仲良く暮らして欲しいと願いながらも「身勝手ですまない、申し訳ない！」と謝りながら放流した。

水槽が空になって、メダカの取得になるが、周りで飼っている人を探してもなかなかいない。そのうち、沢山飼っている人が見つかり、いただく約束をした。メダカは5、6月頃に卵を産むので少し大きく成った7月に差し上げますとの事。我が家では、水槽を綺麗に清掃し、稚魚用の餌を買って、準備万端待っていた。待ちどろしい7月に入って、そこの家に行くと、庭に大きな水槽が3個ほどあり、沢山泳いでいた。稚魚は、親メダカとは別の水槽で飼われている。稚魚20匹位と水草もいただきメダカの飼育が始まった。

1年で卵を産むよ！と聞いていたが、1年を過ぎても気配がなく、2年目の昨年3月末頃に、たまたま孫が来ていて、水槽を食い入るように眺めていると、メダカのお尻に卵みたいな物がくっ付いていると言う。よくよく水槽を眺めて見ると確かに卵らしい。

貰った時に、卵は浮き草などに産み付ける。それを採取しないと親メダカが卵を食べてしまうと聞いて



▲飼育水槽とメダカ

いた。浮き草を取り出して指で触って調べてみると、小さな丸い粒がいくつか有り、これを採取してガラスコップに入れてみた。卵は5個位採取でき、10日位で孵化するとの事だったが一向に孵化しない。



無精卵かも知れないと考え、飼育店で雄雌を選んでもらって2匹購入して来て、一緒に飼っていた。それでも孵化が見られない。有精卵を産ませるためには、複数の確かな雄雌を飼う必要があると考えた。

ネットでメダカを販売している事を知り、ヒメダカ30匹を通販で購入手配した。数日後に、しっかり梱包されて水の入ったビニール袋で元気なメダカが届いた。生き物まで通販で買えるのには驚いた。



▲デジタル顕微鏡

今回は、この30匹を1匹ずつガラスコップに入れ、ネット知識からの見分け方で雄雌に分けた。そこから元気そうな各5匹を選んで、別に飼っていた。しかし、産卵はあるが卵が生きているのか？育っているのか？虫メガネで拡大しても分からない。これは顕微鏡が必要だと考えた。

やはりネットで調べると「デジタル顕微鏡」というものが有る事を知り、4千円程の価格だったので早速購入した。これは画像ソフトを使って撮影した映像をパソコン画面上に映し出すもので、映像を出すのに一苦労したが、なんとか操作方法は分かった。

5月3日だったが、卵を映し出して見た。ぼやけた画面だったが、少し大きく見える卵が現れ、黒い目が見えていた。それが動いた「オーヤッター！」と叫んだ。感動の一瞬だった。やっと卵が有精卵で、メダカが育っている事を確信できた。

それからは、安心して卵の採取に励んだ。採取は日ごとに増え5月末ごろには1日で50個位となった。7月頃には全部で500個以上になった。孵化も中旬頃から始まり、稚魚も数え切れなくなった。今は成長して200匹位が泳いでいる。

平成 30 年 7 月に定年退職し、その秋から桜船会に入会しました。行事開催には、出来るだけ参加したいと思います。よろしくお願ひいたします。

昨年秋の懇親会時に、桜船会だよりに何か書いて欲しいとの要請がありました。書くことはあまり無いですが、入社からの会社生活、そして今の状況を思いつくまま書いて見たいと思います。

昭和 47 年 4 月、旧船電に入社、管球製造部に 2 交代勤務で配属され、蛍光ランプの製造作業を行っていました。配属された製造ラインでは当時稼働が少なく、他の製造ラインへの応援が多くなり、そのため蛍光ランプ（直管：10W～110W と円形ランプ）、水銀ランプ製造に関わり、一通りの作業が出来たことは貴重な経験と知識を得たと思います。

昨年秋のバス旅行で行った MLF 掛川北工場で、当日ライン稼働が終息するという直管 40W ラインを見て時代の流れを感じさせる光景に会えてよかった。

蛍光灯時代が約 11 年過ぎた昭和 58 年正月明け、所内に研究所らしきものができ、そちらへの転勤の要請があり、早速仮住まい地の京電内に単身（当時新婚）で移動しました。

大船からは私を含め 4 名が個々の仕事に付き、私はレーザーディスクを読取る「光ピックアップ」単体を大船で製造するため、開発部門へ出向き仕事の内容を習得して、3 月中旬に一足先に大船に戻り 4 月からエレ本（高度情報通信事業推進本部大船工場）がスタートしました。

その後、品質保証グループに移り開発部門で生み出した製品の製品試験等を行いました。

事業所もエレ本→通シ研→情電研→情シ研→情報総研と変わり、職種もサーバ管理・ネットワーク管理等を務めました。

中でも退職前まで行っていた東部研究所ネットワーク運用構築では、所員が業務・研究開発でパソコン、各装置をネットワーク接続利用する際に、ネットワークを絶対に止めない（停電除く）環境で安定をした運用ができたことは何より嬉しく思います。

社内でも先行して、最新のネットワーク機器装置を導入する際は、関係者の協力を頂き、社会の動向に少しでも触れる機会があったことに感謝したい。

退職は、54 才の時に雇用制度（シニアエキスパート）の確認及び説明を受け、年金受給が 65 才からでもあり私は最大の 65 才まで定年延長を希望しました。賃金は減少しましたが、他は社員同様で仕事内容も継続してできました。

しかし、60 才を過ぎた頃から体力低下と体のあちらこちらが痛みを発し、週 5 日の出勤が非常に辛かったです。そのため、休暇・半休・フレックス等を使い体のケアをして、なんとか定年退職ができました。

10 年前に家の近くの農業試験所跡に神奈川県立花と緑のふれあいセンター「花菜ガーデン」ができたので、早速サポータに応募しました。

活動はその春からスタートし、約 100 名のサポータが集まり、中には同年代が多くいました。

サポータ作業は、花の手入れ中心の園芸作業と野菜の手入れ中心の農業作業、開催サポート作業の 3 つがあり、好きな作業を選び、自分に可能な曜日にサポート作業することです。私は農業作業を中心に月 4 回、年間 50 回程農業サポート作業をしています。

作業の中では、スタッフからの色々な知識と情報等を教わり、役立つことが多くあります。

また、サポート・スタッフと共に年 2 回の交流会があり仲間も多く、長く続けたいと思います。

今では、農業サポート作業で得た知識を活用して 5 年前から市民農園の 1 区画を借りて小規模ながら色々な野菜を作り、多少ではあるが自給しています。今年から 2 区画に増やし、いままでやっていない野菜等を作り、さらに採れた野菜を使った料理を作りたいと思います。



（写真：令和 2 年 3 月 市民農園にて）

神奈川県最高峰の山はどこでしょうか？この問いに直ぐに答えが出てくるとすれば、かなりの山好きの方だと思います。丹沢山地にある、標高1673mの蛭ヶ岳(ヒルガタケ)がそれになります。昨年4月に念願の登頂ができましたので、紹介させていただきます。

私は、三菱電機に入社後、計電・シ電、情通研を経て、2002年に情報総研に異動し、その間、ディスク、携帯電話、組込みソフトなどの開発に携わってきました。昨年定年となり、出向先だった特許関係の会社に再就職し今も働いています。三菱電機入社以来、神奈川県に住んでいて登れていない神奈川県最高峰の蛭ヶ岳のことがずっと気になっていました。定年を期に、意を決して登ることにしました。

蛭ヶ岳は丹沢山地中央奥深くにあり、どこから登っても時間を要します。今回は、主要コースの一つでいわゆる丹沢主稜縦走コース(西丹沢ビジターセンター～檜洞丸～蛭ヶ岳～丹沢山～塔ノ岳～大倉バス停)での登山。通常は1泊か2泊のコースですが、仕事が忙しいため、日帰りにしました。勿論万が一を想定し、山小屋への宿泊や途中での短縮ルート等の代替策も用意。

1週間程前に降った雪が消え、しかも丹沢特有の山ヒルが活動する前の4月21日(日)に決行。朝5時40分に藤沢市の自宅を出発しJRを乗継ぎ、松田駅前からバスに70分乗り、丹沢湖経由で登山口となる西丹沢ビジターセンターに8時30分に到着。登山届けを出し登山開始。まずは標高差約1000mを登った先の檜洞丸(ヒノキボラマル)を目指す。ミツバツツジ、山桜などが咲き誇り気持ちがいい。晴天で途中、富士山も良く見えた。標高1600mの檜洞丸に近づくと木が少なくなり、印象的な木道を歩き2時間20分程で頂上へ。ようやく蛭ヶ岳が見えた。

小休止後、目標の蛭ヶ岳を目指す。この檜洞丸～蛭ヶ岳間は、一旦300mも下ってその後100m程のアップダウンを何度も繰り返す負荷のかかるコース。

また、やせ尾根や鎖場もあり気を使う。ひときわ大きな山体の蛭ヶ岳が少しずつ近づいてくる。最後に、300m以上の鎖場のある急登を登り2時間程で蛭ヶ岳山頂に到着。奥深くなかなか来難い所で、念願だった蛭ヶ岳によりやく登れて満足。山頂は眺望が良く丹沢山地一円の檜洞丸、大室山、塔ノ岳も良く見える。ここで遅い昼食を取り小休止。

次に神奈川県唯一の日本百名山である標高1567mの丹沢山を目指す。蛭ヶ岳～丹沢山間は、低い笹に覆われた尾根が広がる非常に見晴らしのいいコース。今回のコースの中では最も気持ちの良い所で、いつまでも居たくなるような尾根歩きができた。

1時間10分程で丹沢山に到着。ここは二回目、山頂は平坦で広い。この少し前から天気が下り坂で、先ほど通ってきた蛭ヶ岳山頂はガスに隠れてしまい、怪しい雲も出てきた。

この後は、下りが大半。塔ノ岳へは40分で到着。日曜日にもかかわらず、午後3時過ぎで天気も悪くなってきたためか、塔ノ岳山頂の広い休憩エリアには他に1人しか居なかった。最後の軽食を取った後、大倉尾根を下山する。標高差約1200mをただひたすら下ら下らと下る。疲れた体に下りの衝撃がしみる。途中で、下山中の人たちを沢山見かけた。1時間45分程掛かって大倉バス停へ、夕方5時15分に到着。暗くなる前に無事たどり着けて良かった。今回は、ずっと気になっていた蛭ヶ岳に登れて、気持ちの良い尾根歩きもでき、十分に満足、感謝。

なお、去年は、他に伊豆の天城山、奥秩父の両神山、北アルプスの立山・剣岳にも登りました。



桜船会の前身は三菱電機「定年退職者の会」として1993年に設立され設立時の会員数は125名でした。

1998年に桜船会のロゴが制定され「桜船会だより」創刊号が発行されました。当時の会員数は236名です。翌年の1999年から「桜船会だより」が年2回発行され、現在に至っています。

2004年には現在も使用している「会旗」が制定されました。

2009年に近隣三場所(大船地区・鎌電地区・MPC)OB会の情報交換会が開始され現在に至っています。この年の会員数は329名で過去最高の会員数を記録しています。

近年の活動状況としては2013年に桜船会のホームページを開設し、ネット網を通して役員同士、役員と会員、会員同士の情報のやり取りが可能になりました。更に同好会制度を立ち上げハイキング同好会とデジタルカメラ同好会が活動を始めました。

2016年の総会からは総会会場前の待合室空間を使って、会員の皆さんに出品いただいた「趣味の作品展示会」を開催し好評を博しています。

役員会は次の役員構成で毎月一回情報総研内の会議室で開催しています。

会 長・・・1名

副 会 長・・・2名

事務局長・・・1名

事務局長補佐・・・労組東部研究所支部書記長

幹 事・・・若干名

会 計・・・2名 (内1名は労組の役員)

顧 問・・・若干名

会計監査・・・2名 (内1名は労組の役員)

* 労組役員は関連する議案がある場合のみ会議参加

役員会には活動部門として、行事班、編集班、展示班、ホームページ班があり役員の中から班長を選出し、班長を中心に活動しています。

行事班では春の屋外行事、親睦バス旅行、春と秋の懇親会などを担当し、多忙を極めていきます。

編集班は、春と秋に発行する「桜船会だより」を担当し、執筆者の掘り起こしと執筆者との原稿確認、原稿の校正と印刷の手配をしています。

展示班は2016年の総会から活動を始め、趣味の作

品展示会を企画し今年の総会で5回目となります。

ホームページ班は、行事の都度新しい情報をアップロードしてネットに発信しています。

更に毎月の会合では会計担当者により月々の収支報告が行われています。

総会、各種行事の前の会合では、役員全員で約1時間かけて会員の皆様へ案内書、資料を郵送するための発送作業を実施しています。

事務局

会員動向 (2019.10.1~2020.4.20)

■会員動向 (敬称略)

・会員数：211名

・入会者：1名

矢野 邦俊

・退会者：6名

駒場 修一 竹中 岑生 溝口 泉

石川 泰 千葉 勇 武藤 正

・物故会員：3名

永井 頼光 石井 茂 野上 正男

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

■編集後記

新型コロナウイルスの猛威がすさまじく世界中が大混乱に陥っている。有史以来人類はペストや天然痘、コレラ等の細菌やウイルスと戦い、何とか乗り越えてきた。今回も本誌が発行される頃には何とかパンデミックが収束して普段の生活が戻ってきて欲しいと祈るばかりである。

4年間微力ながら編集班長として務めさせていただきましたが、次号から後任の方にバトンタッチする事になりました。大変御世話になりありがとうございました。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

桜船会だよりの執筆者が不足しており掘り起こしに大変苦勞しています。会員の皆様には、是非執筆いただきたくお願い致します。

■桜船会 URL <http://www.ousenkai2013.com/>

編集責任者：桜井貫智

編集委員：皆川良司

印刷所：(株)さんこうどう

